

「今井先生」の北京訪問記

チンチン

一九八八年五月二十九日(日)

朝十時発の日航七八一便にて北京に発つ。

前日は横浜でサロンコンサートがあった。中国行きの飛行機は羽田から出る、という誤った思い込みから、二十八日夜の宿を横浜に近い羽田東急ホテルにとったのだが、実は成田発。朝ゆっくりしてから出発しよう、というもくろみは見事にはずれ、早起きをしてホテルから成田行きリムジンバスに乗り込む。

北京到着は午後二時十五分。スケジュール通りである。天気も今ひとつすぐれないが、空港自体も決して明るい感じではない。中国事情一般については友人・知人に聞いてある程度の覚悟はして来たつもりであるが、どうもあまり良い予感がしない。

だいたい中国訪問直前になって「指揮者が骨折のため出演不能。についてはコンチェルト演奏の時には指揮も自分でやってくれ」という要請もあった。指揮しながら演奏する事自体はやぶさかではないが、リハーサルの事を考えると気が重い。何しろパート譜持参の旅でもあり(北京で演奏予定のモーツァルトの二台のピアノのためのコンチェルトの楽譜が中国にはない、というのである)、譜読みから付き合わなければならぬ。「案ずるよりも生むがやすし」とは言うが…。

健康診断のカウンターで「異状なし」のカードを提出する。その後はパスポートのコントロールである。ビザはすでにウィーンで入手してあり、特に何も聞かれずにドン、と入国のスタンプが押された。

大分くたびれた感じのベルトコンベヤーから出てきた荷物を受け取ると、次は税関検査。家庭電化製品や

時計、カメラなどはしっかりチェックされる、という話を聞いていたので、提出用の紙に一応すべて正直に記入する。国内に持ち込んだ個数と出発の際に持ち出す個数が合わない、と、罰金をはじめ面倒な事になる可能性が大だという。

これに当てはまる物品は用紙の赤枠の中に記入する。カメラがサブカメラも含めて二台、インタビュー用のマイクロカセット使用のテープレコーダー。時計は記入しなくて良い事になったらしい。ヘアドライヤーも記入したが、うっかりと日本国内専用のもを持って来てしまったので、どうせ使い物にはならない。中国の電力は二百二十ボルトである。そして持参の楽譜。これはれっきとした「印刷物」である。政治的意図は楽譜には存在しようもなく、チェックにひっかかる筈はないが、パート譜は前もって準備したコピーも含め、かなりの量だ。おまけにこの楽譜は招聘元の北京中央音楽学院に正式に購入依頼され北京に置いていくものでもあり、一応その旨申告する。

正直に「赤いゲート」に行く。「緑のゲート」と違って、申告すべき物品を持ち合わせている人のゲートである。スーツケースを開けさせられるか、と心と鍵の準備だけはしていたが何の問題もなく、記入したものを実際に見せる必要もなく、フリーチェックで入国できた。

空港には呉迎君^{ウイ}が迎えに来ていた。呉君は北京中央音楽学院長、そして中国音楽家協会副首席^{ウイ}の呉祖強^{ウイ}教授の息子で、一九八二年から一九八四年までウィーン国立音楽大学ピアノ科に留学したピアニストである。現在は中央音楽学院で教鞭も執っている。彼は当地でのモーツァルトの二台のピアノのためのコンチェルトのパートナーでもある。

街へ向かう。日本の車が多い。聞く所によると、中国という国は何事も、やる、となったら極端に大がかりにやる傾向があるという。ひとたび車を輸入する、となると何年か一度、外貨がたまった時点で相当の台数をまとめ買いするらしい。それも同じものばかりを、である。したがって乗用車を買う、と決まると同

じ形、同じ仕様（パワーウィンドー付きの高級仕様のものが多い）のものを必要以上に買えるだけ買入れる。それを公用車、タクシー、その他の用途に合わせて各方面の組織や民間に卸していくわけだが、特に計画性あっての話ではなく、国費で買った方がいいが数年たってもいまだに未使用のものも多数あるらしい。

同じ事はこれから訪問する音楽学院でもいえる。国自体はそれほど裕福ではなさそうだが、備品としてのピアノは相当良いものがたくさん教室に入れられている。スタインウェイ、ベーゼンドルファーなどの高級品に始まり、日本製のピアノも多数使われている。ヨーロッパ製のグランドピアノは買い過ぎてしまったのか、学生用の練習室にまで入れられている。日本製のもはアップライトが中心で、これまた特別予算の枠を使い切るために買入れたものか、何十台という楽器がまだ梱包されたまま、どの教室に入れられる、といった当てもなさそうに大学のロビーを倉庫然と占領している。

国家の財布の心配はともかく、自分のお金を持たなくては街で自由がきかない。道中「北京飯店」というホテルに寄って、日本円を中国の貨幣に換金する。とりあえず一万円替えたが、これでも結構使い度がありそうだ。

宿舎に着いたのが午後三時半。学院内の「招待所」という、いわば寮である。外国から招聘された教師や研究者、留学生、そして学院を卒業した後にもしばらく勉強を続けたい学生などが寝泊まりしている。

これが我々日本人にとっては大変に住みにくい、不便な宿舎なのである。ここに入れられてみると、日本とは何て住みやすい国なのだろう、とつくづく痛感する。

私の部屋は中でも応接室と別に寝室が付き、個人用のバスルームもある、といういわば「スイート」的な最高級の部屋ではあったらしい。しかしバスタブはあってもお湯が出ない。暗い。何となく埃っぽい。食事は階下の学生食堂でとるのだが、短い食事時間を逃すと全く何も食べられなくなってしまった。中国のレストランは大きな所でも比較的早い時間に店を閉めてしまうが、夕方五時半までに食べる、というのはあま

りにも不便である。カップヌードルでも持って来るんだな、と悔やんでも後の祭、郷にはいったら郷に従うしかない。

部屋に電話はついていても市内通話のみ。どうやら中国では市内電話は無料らしい。ただし市外電話、ましてや国際電話となると、しかるべき所に行かないとかけられない。外国人用のホテルに泊まればそこからかけられるが、この寮からは全く不可能といって良い。一番近くのホテルまたは電話局までは徒歩で二十分。後日一回電話局に向いてみたが、あまりの人の多さに圧倒され、そのままあきらめてしまった。

中国という国はただただ広い、人が多い、自転車が多い、不便、あまり衛生的でない、と、私の受けた第一印象は、それ程華々しいものではなかった。ほぼ中国語しか通じない、というのも不便のひとつである。もっともこれは自分の勉強不足といえばそれまでだが。一般の人々の立ち居振舞いはまだ全く洗練されていない。個人的に知り合えば別だが、未知の他人にはたとえ足を踏んだ、とか、何らかの迷惑をかけても謝る必要はない、という話も聞いた。踏まれたら踏まれ損、踏まれるのが悪い、というわけである。見てみるとどうも現実にそうであるらしい。しかし別の観点から考えてみれば、ここまで人口の多い中国で暮らしていくための、ひとつの生活の知恵なのかもしれない。赤の他人に対してまで気をつかっては、それこそ日が暮れてしまう。

それに加えて中国の文化革命の影響も、人々ががさつになってしまった一因である、という。文化革命の思想、つまり既製のものを全て否定する、という観点から、子が親を敬う、若者が年上の人を敬う、また学生が先生を敬う、といった、以前は厳しい躰のひとつでもあった儒教の教えがまったく生かされなくなってしまう。老いも若きも人民は全て平等、というのも概論としての善し悪しはさておき、個々の場合にはかえって人間関係の潤滑さに柔軟性を欠いてしまう場合も起こり得よう。

ところで北京第一夜の夕食は、幸いにも学生食堂で五時半に食べずにすむ事になった。呉君のアルバイトは

学院の敷地内にある公務員住宅で、そこに招待されたのである。院長御夫妻、呉君の生徒達と賑やかに食事をともにし、楽しいひとときであった。呉君の母上（やはり学院のピアノの先生である）の手料理もおいしく、単身で旅行をする身にとっては「家族っていいものだな」という実感がわく。

呉君もまだ若い（三十歳くらい）とはいえ、すでに結婚し、生まれたばかりの娘もいる。ただ彼の若妻と愛娘は遠く上海にいるそう。中国で夫婦共稼ぎは当たり前の事とはいえ、ここまで離ればなれではかわいそう。呉君としては家族を北京に呼び寄せたいのは山々ながら、仕事の調整がうまくいかないらしい。ただ奥さんの実家が上海だとのこと、彼女の両親が孫娘かわいさに手放さないのかも？

中国の所得水準は日本のそれとは比べものにならない。その上若い呉君にとって不運な事に、音楽家の演奏活動は月々の所得に含まれる仕事とみなされるので、いくら演奏会を行っても副収入にならないのだそうだ。同じく私の今回北京での活動も、全てロハのボランティアベースである。

国立音楽院の院長の住宅がどれほどなのか、というのも野次馬的興味のひとつであった。実感としては「へー、よくこれで我慢しているな」といったもの。決して広くはない。台所の設備なども日本では考えられないくらい古いものである。食器なども何の変哲もないごく普通のもの。とはいっても冷凍冷蔵庫、カラーテレビ、ビデオ等々、一般家庭にはまだ夢の夢である文明の利器の数々が揃っているのはさすがだった。

五月三十日（月）

朝八時半に呉宅に寄り、お粥の朝食をすませます。おかずは昨夜の残り物の春巻その他。

その後は学院の教室で、まずは呉君と二人で「お手合わせ」である。曲目はモーツァルト、ケッヘル三六五変ホ長調の二台のピアノのための協奏曲。テンポの調整、バランスのチェック、装飾音の入れ方、そして

カデンツのアンサンブルなど細部の打ち合わせが多い。全体的には悪くない流れだが、ピアノ二台で共演する作品にはそれなりの難しさがある。

たとえば各所で必要となるお互いのタイミングの取り方。ピアノが二台横に並んでいる場合にはパートナーの手が見えるので、ある場所を同時に弾き始めるのはそう困難な事ではない。しかしこれがコンサートのステージでお互い向かい合ってそれぞれのピアノの前にすわり、見えるのは相手の顔ばかり、となると、合図のタイミングに馴れるまでが大変である。

リハーサルはピアノ科の教室を借りて行ったが、入っている楽器は二台ともスタインウェイ。大したものだ。きつと大切に使っているのだろう、毎日の授業に使用している割りには楽器自体の傷みもそれ程ではない。ただ学院には暖房はあっても空調の設備は全くなく、夏になると相当な暑さになるらしい。

五月ごろは北京で一番良い季節だそう。春先は「黄砂現象」といって砂漠からの細かい砂が大量風になってくるため身体じゅう砂まみれになるし、夏に向かつては暑さが厳しい。クーラーがある場所が少ないために一旦暑くなると逃げ場がない。ただし空気は比較的乾燥しているので日陰に入りさえすれば何とかしのげるといふ。

昼食は学生食堂で食べる。学生用の食事よりは少しましなものを二品とごはん、それに飲み物がつく。ビールをもらったが冷えていないので感興いまひとつ。食事の席ではハンガリーから四週間の予定でこの学院に招聘されているトランペットの先生と一緒にであった。話を聞いてみると、管楽器はまだ良い楽器が揃っていないし、レベル的にも「今良くなりつつある」といったところだそう。

中国のクラシック音楽熱は相当なものである。コンサートは当初に比べて催される回数が増えたために、いつも満席、とはいかぬが、それでも根強いファンが多い。英才教育も定着し、音楽専攻のコースは小学校四年生から始まり、大学まで続いたカリキュラムが設けられている。北京に家族がいる子供はこの音楽院に

通学できるが、そうでない子供達のためには院内に寮もあり、日常から音楽に密接した生活が送れるよう配慮されている。

昼食の際のビールが効いてしまったのだろうか、眠い。実は五月初旬からかなり強硬なスケジュールが続いている。ユーゴスラヴィアの首都ベオグラードでのオーケストラ協演からウィーンの自宅に戻った翌日、休む間もなく日本へ飛び、時差が充分とれる余裕もないままに日本での活動を続けてきた。いつもはどちらかと言うとそれ程悩まずに仕事をこなしてこれた方であったが、今回ばかりはいささかきつい。睡眠も平均四〜五時間以上はとれていない。どんなに就寝するのが遅くとも、また睡眠薬を服用しても、朝六時には目が覚めてしまい、眠れないのである。中国に来て以来の一種のカルチャーショックの影響もあるのか、多少過労気味で熱もあるようだ。今の眠気を感じではどうも寝つかれそうだ、と思い、午後の練習はキャンセルしてただただ眠る事にする。

とは言っても、夕食は五時半までにとらなくてはならない。抜かしてしまいたい気もするが、空きっ腹を抱えて夜ベットにいるのは何ともせつない。頑張って起きて食堂に行ってみたところ、夕食には二品のおかずとライスの他に丼一杯のスープがあった。トマトと卵こそ入っているものの薄味で、あまりだしも出ていない、顔の写りそうな、言わば「根性に欠ける」スープではあったが、毎回こんなにたくさん食べては胃のほうを持ちそうにない。せっかく作ってくれたものを残すのはしのびないが、「もったいない」の精神は今後できる限り捨てる事にした。

夜七時から学院の小礼堂にて第一回目のオーケストラリハーサルがあった。ステージの上には一応二台のピアノがあるが、音が合っていない。しかし今更言ったところで何となるものでもなく、我慢。ステージが狭いのでオーケストラ全員はとてものらない。仕方ない、オケのメンバーには客席の椅子を片付けて平土間で弾いてもらうことにした。指揮をしたりアンサンブルを行うにははなはだ不便だが、我慢、我慢。中国で

は何事が起こっても、それを自分のストレスとして感じてしまったら負けである。「そんな事もあるさ」と鷹揚に構えるのが一番だ。ただし何事にも毎回相手の要求通りに動いていると、今度は足もとを見られるようになるので注意も必要。

ともかく二台のピアノのコンチェルトからリハーサルを始める。オーケストラは学院のメンバーで構成された中国青年交響楽団である。コンサートの録音を聞かせてもらったところ、シュトラウスの「英雄の生涯」などかなりハイレベルの良い演奏をしている。時と場合によっては、そこらのプロのオーケストラより良い演奏ができるだけの潜在能力はありそうである。

と、期待をしていたのだが、何の事はない、今日のところはまだまだただの学生オケである。パート譜を渡したばかりなので、みな譜読みの段階である。それにしても管が弱い。チェロは半分眠っているような反応しかない。オーケストラ指導の白宇教授（グイナ）が右往左往し、シドニーのコンセルヴァトリーに留学経験のあるコンサートマスターの陳允君（チェン）が汗をかきかきサポートしてくれるが、何とも心細い出来である。二台のピアノのためのコンチェルトに大方の時間をとられてしまったが、もう一方のコンチェルト、ケッヘル五九五口長調の方も一応ざっと通してみた。

このオーケストラは先日モーツァルトのコンチェルトを、来日したこともある中国人ピアニスト、フー・ツォンと、やはり指揮者なしで共演したばかりなのだそうだ。リハーサルでは終始「オケがうるさい！」と怒られ通しだったらしく、それが原因でメンバーが多少萎縮してしまっているようにも見受けられた。

リハーサルは今日以外にはあと一回のみ、その後はコンサート当日のゲネプロしかない。その限られた時間のなかで何とかできる限り形をつけたいと願うのは山々ながら、指揮しながらのアンサンブル指導は残念ながら私の本業ではない。真心をもって接する事しかできないのがつらいところである。

あまりの気疲れと、夕食後すでに時間もたって空腹になっているところに、リハーサル終了後呉君の家に寄って飲んでビールがしみわたる。

五月三十一日（火）

朝九時に呉宅で朝食。私の普段のウィーンでの生活を思いやってか、今朝は洋風の食事してくれた。つまりトーストとジャムとコーヒー。

トーストとはいっても焼くのはパンではない。白い饅頭（肉饅頭の中味のないもの）をスライスしてトースターで焼くのである。やはりちょっと雰囲気が違う。コーヒーはもちろんインスタント。これだったらお粥のほうが美味しいなあ、といった印象である。でも呉君としては精一杯気を遣ってくれているのだ。ここは素直に喜ぼう。

午前中は昨日と同様に呉君とのリハーサル。今日は実際にピアノを動かし、お互いの手が見えないようにして合わせてみる。

リハーサルの途中でピアノ科の主任教授の周ゾグレン先生に会う。彼女はハンブルク生れで、ドイツ語には全く不自由しない。学院内で公開講座を催しましょう、との事、内容を決めなくてはならない。少し考えたあと、タイトルは「譜面を読む際に気をつけるべき事柄について」と決定した。楽譜に印刷されているのは何もオタマジャクシの羅列ばかりではなく、注意深く観察するとそこにいろいろな発見がある。普段「当たり前」と思い、改めて思い起こしてみる気も起きないような事が案外おさなりにされていたり、といった内容である。

昼食は食べないことにした。どうも胃が重い。まだもう一息体調が勝れぬため、少しでも多くの休息をとりたい。夜も寝ていて妙に汗をかく。胃が重いのは中華料理の油のせいだろう。

さあ、昼寝をしよう、と思い、パジャマに着替えて少しとうとしたと思っただけの瞬間、ドアがノックされた。最初はほっておいたのだが、あまりにしつこいノックに仕方なしに起きてドアを開ける。部屋の掃除係りの

お姉さん（服務員という）がお湯を持ってきてくれたのである。バスルームに湯が出ないのは前述したが、そのかわりに、と多分階下の学生食堂で使用していたらしい大きな湯のタンクを調達してくれた。それだけあっても、とてもバスタブを満杯にするには及ばぬが、行水ぐらいは可能となる。しかしタンクはタンク、一回入れた湯が時間とともに冷めるのは世の定めである。そのお湯の補充、及び部屋の掃除をしたい、という。

今日は本格的に休息をとって何としてもこの疲れをとってしまおう、と横になった矢先の事ゆえ腹も立ったが、向こうには向こうの都合もあるのだろう。中国語しか通じない相手に身振り手振りと言葉でこちらの要求せんとする事を理解してもらうには体力が不足している。あきらめて散歩に出ることにした。

歩いていても寒気がする。風邪かな？ 汗を冷やさないように気をつけないと……。ぶらぶらと学院から一番近いホテル、民族飯店まで行くことにした。近いとは言っても歩けば結構な距離である。同ホテルには今日あたりヤマハ音楽振興会スタッフの河江氏と岩間氏が到着する予定である。うまくつかまえて話でもできれば気晴らしになるかな、と淡い期待を抱いてはいたのだが、残念ながら不在であった。

しかしホテルの売店で日本の週刊誌（週刊新潮）を買って、当座の時間潰しの材料を手に入れる事ができたのは喜ばしい。だが持ち帰ってパラパラと見てみるとどうもちょっと様子がおかしい。あれ、と思ってもう一回注意深く見てみると、女性ヌードの載っているページが全て切り取られ、なくなっている。週刊新潮にはもともとそういったページは少ないが、雑誌によっては大変だろうな、などと妙な心配をしてしまった。

夕方六時に北京市第一聾啞学校校長の李宏泰氏イイカクタイの訪問あり。李氏は私の父の知人である。父からことづかった日本のおみやげを手渡すために、御足労ながら私の宿舍まで来ていただいたのである。ところが氏は中国語以外は全くダメ。困ってしまった。ある程度の筆談を試みてはみたが、すぐ行き詰まってしまふ。弱った、と困惑していたところ、そこに強力なる味方が現れた。田島翠さんタニシキという日本女性である。彼女は国立

音大を卒業したあと音楽画像学の研究に携わり、現在この学院に留学しているのだという。中国語は流暢で、「私は日本人だ」と言っても中国人に信じてもらえない事すらあるのだそうだ。まさに天の助けである。聞けば彼女の部屋も同じフロアだとの事、何となく心強い。

今日は終日食欲がわかず、夕食もぬいてしまった。本来食べる事には目がないくせに、それを面倒くさいと感じるのはあまり良い傾向ではないなあ、と思いつつ眠りにつく。熟睡したい。何とか体調を回復しないと明後日のコンサートで息切れしてしまいそうである。指揮をしながら二曲のコンチェルトを弾くばかりでなく（これは休憩後のプログラムである）、前半にはソロもこなさなくてはならぬ。コンサート直前にはゲネプロもある。オケがオケだけにゲネプロで手を抜く、というわけにもいかないだろう。一日でもいい、オフの日が欲しいが、残念ながら今しばらくは無理そうである。

六月一日（水）

八時起床。昨晚ようやく満足がいく程の睡眠がとれ、久し振りにさっぱりとした気分が目さめる。ありがたい。相変わらず不自由な風呂ではあるが、工夫しながら頭のとっぺんから足の先まで洗い流し、心身共に新鮮になれた。

九時に呉宅にて朝食。例のトースト饅頭を頬張っていると、外からパープーという昔の豆腐屋のラッパのような音が聞こえてきた。この音は庖丁研ぎの合図だそうだ。床屋もやるといふ。中国ではまだこういった行商の商いが盛んである。

食事を済ませ学院構内を歩いていると、今日は子供の数が多し。親子連れも多い。何かと思えば今日は学

院の大礼堂で学院附属音楽小学校の演奏会が催されるのだという。この大礼堂はベルトルツチ監督の映画「ラストエンペラー」のシーンでも出てくるが、主人公である皇帝が生まれた場所だそうだ。今日では建物の内部はすっかり改装され、本格的なコンサートホールになっている。

中に入って聞いてみる。小学生だけで構成されたストリングオーケストラ（優秀な仕上がりである）やクラシックの音楽ばかりでなく、中国古来の琵琶や胡弓の演奏もある。なかなか興味深い。

全部を聞いている時間もなく、中座して練習室に向かう。今日は呉君とのアンサンブルのリハーサルはなしにして、自分のソロの曲と変口長調のコンチェルトを重点的にさらうことにした。久し振りに良いコンディションに恵まれ、昼食の時間も惜しんで三時過ぎまで根をつめて自分の練習に励む。

練習室は小さく、防音設備がほどこされているが換気の効率が悪いので、扉を締め切って練習していると息が詰まってくる。しかし練習室と言えどもピアノは新品のベーゼンドルファー。音も良いが、中国に来て旧友に会ったように懐かしい。

昨日ほとんど食事をとらなかったで、今日の夕食はきちんと食べることにする。時間は五時半。おかずに出された魚の骨をのどにひっかけてしまい一瞬あせったが、御飯のかたまりをいくつか飲み込んだらようやくとれた。

夜七時半からは第二回目のオーケストラリハーサルである。今晚はまず一台のピアノ、その後二台のピアノのコンチェルト、という順序で行うことにした。

各人、余暇を利用して懸命にさらってくれたらしい。一昨日とは雲泥の差の出来映えである。少し安心。明日の本番に期待しよう。今更細かい事ばかり要求して萎縮されたりしてはかえって逆効果。「すごく良くなったよ。明日にはこの調子でもっと登り坂になるよう期待しています」と誉めちぎってリハを終える。

「うん、僕達はいつも本番が最高の出来になるから、きっと大丈夫ですよ」とは言ってくれたものの、こちらの心労、少しはわかってきているのかなあ…？

とにかくここに至っては中国式のおおらかな態度で臨む決心をした。なるようになるさ、ドンマイ、ドンマイ。

六月二日（木）

朝九時十五分に車が迎えに来る。コンサート会場である北京音楽庁（音楽堂）へ向かう。道は結構混んでおり、東京都内なみである。信号はあってもあまり役にたっていないようで、車の間をぬって人と自転車とがうろうろと危ないことおびただし。

会場はかなり大きい。千五百人くらいは入るのだろうか。もともと会場にあるピアノはベーゼンドルファー。それにフォー・ツオンが使うために先日学院から運び入れたスタインウェイを並べる。メーカーが違うが仕方がない。要はモーツァルトの音楽を演奏できれば良いわけである。午前中はオケなしで呉君と二人で最後のチェックをすませ、ソロの曲も少し弾いてみる。響きは良い。ピアノの調子も問題ない。これから夜までの長丁場をいかに疲れずに過ごせるかが今晚の結果を左右する第一の鍵となろう。

午後四時からは会場でのゲネプロである。まず普通の配置で弾き始めてみたが、オケのメンバー同志のコンタクトがとりづらく、トゥッティーもばらばらになってしまふ。急遽椅子を並べ変え、オケ全体をよりコンパクトなスペースの中にまとめてみた。今度は何とかなりそうである。ひととおり最後まで通して演奏してみる。よしよし、こんな物だろう。何とかいけそうである。

ゲネプロの後、軽食をとり外へ出かける。ホールのすぐ近くに今はやりのバーがあった。バーとはいっ

でも日本のものとはおもむきを異にし、喫茶店の照明を暗くしてBGMを流している程度である。若くてちょっとかわいい女性がウエイトレスとして働いているが、態度が無愛想なのはどこの店もかわらない。照明が暗いのであまり目立たないが、机の上や床など決して清潔とは言えないようである。ここでジュースとサンドイッチ、それに冷たい焼き豚などを頼み、これからの重労働に備える。値段は高い。もちろん日本円に換算すればいくらでもないが、一般中国人の平均収入から推しはかるとかなりの贅沢である。それでも店内は若いカップルでほぼ満員の盛況である。

コンサートの開始は七時十五分の予定だったが十分遅れでスタートする事にした。まずは自分のソロだが、プログラムは諸井誠「ノクターン」、三善晃「組曲こんな時に」宍戸睦郎「トッカータ」と、日本人の作品からである。聴衆は静かでマナーも良く、真剣に聞いてくれる。その後シューベルトの即興曲作品九十全四曲を演奏して休憩となった。

休憩後はまずケッヘル五九五の協奏曲、そしてケッヘル三六五の二台のピアノのための協奏曲、という順番である。リハーサルの時には反応が遅くてお荷物気味であった管楽器が今日は見違えるようである。指揮をちゃんと見ながらぴたりとついてきてくれる。逆に弦楽器の方がみな楽譜を見つめて弾き進むばかりで反応がにぶい。テンポが遅くなりそうになって必死であおっても、どこ吹く風、といった風情である。

一応スコアは持ってステージに出たが、指揮、そして自分の演奏、と忙しくしているとスコアのページをめくる暇もなく、結局はほぼ暗譜で演奏は進んでいく。横を向いてオーケストラの指揮をし、その直後にピアノの鍵盤に向かって自分のパートを弾き続けるのはそう簡単な事ではない。特にモーツァルトのコンチェルトの場合次に出てくるメロディーは分かっている、それが果たしてどのオクターブからだったか、などと迷い始めるときりがない。幸いそのような単純ミスもなく無事終了し、まずは大成功のコンサートであった。

終了後は呉君の自宅で彼と彼の御両親、そして学院に留学中の田島嬢に通訳を頼みながら夕食を共にする。無事終わったコンサートの後なもので気分も明るく話はずむ。学院長である呉教授の観察によると、今晚のコンサートでは残念ながら客席に空席も見られたが、演奏会の途中で帰ってしまう人がひとりもいなかったそうである。これは当地では特筆すべき事であるらしい。日本人に比較して物事にドライな反応を示す中国人、コンサートが面白くない、となると演奏途中でもプイ、と席を立って退場してしまうのも日常茶飯事との事。聴衆が全員最後まで興味を持って聴いていたのは、そのコンサートが良いコンサートであった証明なのだそうである。

夜もふけた。十一時に呉宅に暇を告げる。その後は田島嬢の案内で一階上に住んでいる沈^{シウチン}授^{クワン}之君の家を訪れる、という流れになった。沈君は中国唱片社という所で働いている優秀な録音技師である。彼の父上は中国でも有数の歌の大先生で、世界各地の歌の国際コンクールの審査員として国際的にも知られている。

沈君は私が今晚協演したユースオーケストラ（中央音楽学院中国青年交響楽団）のレコーディングもしばしば手がけており、何とかこのオーケストラを外国に紹介してやりたい、という希望を持っている。彼がチーフとして仕上げたテープを拝聴したが、とても良い演奏である。若いプレーヤーは演奏がひたむきなだけに、良い指導者にさえ恵まれれば何の術^{テクニック}いもなく、非常に新鮮な音楽像を演出し得る可能性を持っている。私の宿舎の門限は夜中の十二時である。長居は禁物。再会を約束してして宿舎に戻る。

六月三日（金）

今日は九時から学院の生徒のレッスンをする予定になっている。昨晚の疲れをとるために少しゆっくり休

んでいると、呉君が自宅より蒸したての肉饅を届けてくれた。それを頬張ってレッスン室へ赴く。

レッスンを待つのは呉君の生徒でもある二十一歳の湯さん（シューベルトのさすらい人幻想曲）、十七歳の高君（シューマンの森の情景）、そして二十二歳の郭さん（ショパンのバラード四番）。郭さんはピアノ以外に指揮の勉強もしているそうである。

それぞれ年齢相応に達者に演奏する。使用している楽譜を見ると、ウィーン留学経験のある呉君の生徒のシューベルトはさすがにヘンレー版、シューマンは学院の図書館から借りたポロポロになった年代物のペータース版、そしてショパンは日本の出版社の版を中国語に訳したものであった。中国では必要な楽譜がなかなか手に入らず、よんどころない事情があるのは理解できるが、この日本で出版されているシリーズの楽譜は、現在入手可能な版のなかでベストのものとは言えなくなってきた。事実ヨーロッパではこの版でのレッスンを拒否する先生も少なくない。クラシック音楽を愛し、真摯に勉強する学生諸君のためにも、良い楽譜が楽に手に入るようになる日が一日も早く訪れる事を祈っている。

お昼は周广仁先生のお宅で御馳走になる。家族で楽しく食事をした後、周先生にインタビュをさせていただく。学院のピアノ科の事はもちろん、文化革命当時の事をもうかがうことができたが、この革命が中国の良識ある文化人の心に残した傷跡には、当事者以外には計り知れないものが残っているようである。

午後は田島嬢に同行してもらったのショッピング。ショッピングとはいっても「どうしてもこれを買いたい」というものではなく、散策も兼ねての外出である。行きは院長の車に同乗させてもらえたので楽であった。天気は最高、青空である。もっとも天気が良いとなると六月初旬でもそうとうに暑い。しかし空気が乾燥しているので日陰は涼しい。

確かに物は安い。安さだけに気をとられていると、思わず不要なものまで買ってしまいそうになる。ただ

御土産屋の態度が早くも観光客ずれしてしまっているのが気に入らない。いろいろ見回った結果、硯、墨と筆とを求めた。いわゆる「デパート」にも行って見たが、大した収穫はなし。

ショッピングの後は田島嬢の協力に感謝し、ねぎらう意味もこめて民族飯店内の日本食レストランで夕食とする。中華料理の油で少々疲れ気味の胃には日本食が一番である。巷では「日本人を妻とし、中国人のcockのいるアメリカの家に住むのが男として最高の生活である」というが、毎日中華料理では若いうちならともかく、何だかかえって疲れてしまいそうな気がしないでもない。

夜は学院の小礼堂にて催される盛原君のピアノリサイタルに招待される。盛君はまだ弱冠十五歳、音楽学院附属中学校の三年生である。プログラムはスカルラッティのソナタ四曲、ベートーヴェンの三十二の変奏曲、その後中国人作曲家の作品を演奏したあとチャイコフスキーの四季より十月、十一月とドゥムカ、スクリヤビンのロマンス、そしてショパンのポロネーズファンタジー、という盛りだくさんのものだった。

まだ若いこともあって、音楽の深みとか旨味うまみのようなものは出てこないが、何しろテクニカルには卓越している。現在こうした優秀なピアニストが中国から多数育ちつつあり、国際コンクールでの入賞も果たすようになってきた。クラシック音楽のスターダムは早晚アジア民族の活躍するところとなるだろう、との予測も耳にするが、果たして実際にはどのようになるか。今学生として勉強中である若者達が活躍する舞台は二十世紀である。その時点で数世紀も昔の遺産となる古い伝統の、それも異民族の文化が、果たしてアジア人の手のなかで生き続けていくのだろうか。

演奏会のあとは宿舎に戻り、西ドイツ、ヴェルツブルクからこの学院に留学し、主に中国古来の民族音楽とその楽器について研究をしているミヒヤエル・ヘルムプレヒト君（二十六歳）とひととき歓談した。彼の専攻は作曲だが、ヨーロッパの音楽と中国の音楽、という全く異なる文化の接点などについての感想を聞

く。結局はどうもお互い融合しにくい物のようである。

六月四日（土）

今日は市内観光。観光旅行者として中国を訪れた場合、こうした物見遊山は全てガイド付きのセットになっているが、私のように学院の招聘を受けて個人で訪中した際には多少様子が異なる。

北京市内といっても相当広く、一日で全てを見ることは不可能である。従ってある程度まとを絞り、天壇公園と故宮博物館、そして時間が許せば景山公園を訪れる事にした。今日のガイド役はミヒヤエル君と田島嬢である。ここに住んでいる彼らには珍しくもないものばかりであろう、と思うと多少心苦しい。しかし全行程私ひとりで、となるといささかこころもとない。何しろ町中では外国人用のホテル以外では中国語しか通じない。交通機関もあまり便利とはいえない。流しのタクシーなどもない、と思ったほうが早い。

観光地の様子は直接音楽に関係ないし、個々の説明は専門の観光ガイドブックに譲るとして、広い場所を歩いて、歩いて、歩きつくして足が棒になった事だけ記しておこう。

夜七時十五分から学院からの代表としてアメリカのソートレイクシティーで催される「ジーナ・バックウアー国際ピアノコンクール」に派遣される魯君ルの演奏会を、学院内の新楼演奏庁というホールで聞く。プログラムはすべてコンクールのレパートリーからで、いわばコンクール前の総仕上げである。

学院の代表とはいっても、中国のメンツをかけて国費でアメリカに行くわけである。中国からは彼以外もうひとり、上海の学校より選抜されているらしい。いったいどの程度の演奏をするのだろうか、と期待に胸がふくらむ。そういえば先日私が練習室にこもっていた際に、少し離れた部屋で練習していたのはこの魯君だったような記憶もある。

さて、いざ演奏が始まったのは良いが、好意的に見てもどうもいただけない。投げやりである。身がはいっていない。緊張していつもの実力が出せないのであらう、と想像するが「必死に努力を積んできたのだが、今日だけはどうにもならない」といった感じではなく、「僕はうまく弾けるのが当たり前」と甘えた生活をしていたような節が見える。奢り、とまでは言わないにしても、若いピアニストにとって危険な状況にある事は間違いない。

あとで学院の先生方に聞いてみたところ、彼は調子の良いときは素晴らしい演奏をするのだという。それはそうであらう。さもなくれば国を代表して国際コンクールに派遣されるわけがない。しかし波があるという。つい数ヵ月前にも大スランプがあり、そのスランプの原因を自分自身の中に追及することをせず、安易に先生を乗り換えることによって解決しようとしたらしい。それでも事態は好転せず、今日の結果に至ったのである。このままでは残念ながら第一次予選さえ通過できないのは確実である。

魯君にとっては一生を左右する局面である。数多い中国のピアニストの中から特に選ばれて外国へ行けるチャンスを、みすみす見逃してしまうのはつらい事だろう。こんなチャンスはもう二度と来ないかもしれない。かといって、無理やりアメリカまで出かけても恥をさらすだけであれば、今以上に收拾は難しくなるだろう。今や彼自身だけのメンツの問題ではなくなっているのである。学院のメンツ、そして国のメンツもがそこに存在する事は否定できない。彼を最終的にアメリカへ派遣するか否かが学部会議で問題になるのは避けられない模様である。

自由圏、たとえば日本からどこかのコンクールを受けに行つて失敗したとしても、（そこにプライベートな経済的負担はあったにせよ）この次、というチャンスがある。これは全く個人の自由の範疇の問題だ。しかし中国をはじめソ連、そして多くの東欧の国々からの参加者には、個人の意思だけではどうにもならない、政治的なギャップがある。

今回の魯君の問題についてはこれをどう処理したものか、周先生から個人的に意見を求められたが、私に

は何とも答えようがなかった。まるく納めるには嘘も方便、彼に腱鞘炎にでもなってもらうのが一番妥当である。だがもし今回のアメリカ行きが魯君にとって外国の空気を吸える一生で最後のチャンスであるならば、そして彼自身がそれを望むなら、まわりからむりやり禁止することなく行かせてやるのが「情け」なのかも知れぬ。魯君が「自分には実力があったのに、周囲の人間が勝手に僕の一生をつぶしてしまった」とでも思い込むようになったら、それこそ一番の不幸であろう。

何はともあれ、いろいろな事を考えさせられる一晩であった。

六月五日（日）

今日は仕事はない。学院の車で郊外までドライブである。車にはアメリカ、フィラデルフィアから招待されているヴァイオリンのヘレン・クウォルワツサー先生と、つき添いとしての呉君、ヴァイオリン科の中国人の先生、そして運転手、と満員である。

さあ出発、と思ったら、ガソリンが足りないという。ガソリンを入れるには専用のチケットが必要らしいのだが（学院の経費としての特別処置なのかもしれない）日曜日という事もあって入手に少し手間取った。しかしそれも間もなく解決し、いざ万里の長城に向けて出発である。

万里の長城は月面から見える地球上唯一の建造物である、という。それ程長い。ただ幅はそんなに広くないので、果たして本当に月から見えるのかどうかはちょっと疑問である。

それにしても、どこもかしこも人が多い。ここに限った事ではなく北京市内でも同様であるが、人、人、人の波である。それもほとんど中国人観光客である。家族連れ、夫婦、あるいは恋人同志、と組み合わせはさまざまだが、皆同じようなカメラを携帯し、そこで記念写真の撮影に余念がない。しかしあまりの人の多さに、カメラを構えても被写体との間を横切る人のいないチャンスをとらえるのが難しい。

長城に登ってみると、相当急な階段の連続である。傾斜によっては一段の高さが膝以上もある所さえまればない。要所要所に作られている要塞からはスケールの大きな展望が楽しめるが、そこまで登るには体力がいる。普段から車に慣れきっているアメリカ人のヘレン先生には、そうとうの苦行でもあったようだ。

その後は明の十三陵を訪れる。万里の長城での程よい運動のあとの空腹感もまた快しとは言え、我々もここで少しエネルギーの補給をしない事にはちょっとつらい。昼食の休憩とする。

本場の中華料理は確かに美味しい。味つけは濃い目である。ただ調理の際に使用される油の量が桁外れに多い。それも植物性の油ではなく、ラードやヘッドのような動物性の油脂である。「うーん、ちょっと油がなあ」とは思いながら、酒を飲み飲み何となく食べてしまう。コースともなると皿数は多いし、各皿から少しずつ食べても総量では結構なものになる。食べ終わってから「ちょっと食べ過ぎたかなあ、油が胃に重いなあ」となる事が少なくない。

その重い胃を抱えての見物である。ビールの酔いも手伝って何となく投げやりになりそうな気分……。

十三陵は中国の明時代の皇帝の墓である。そのうちの定陵という墓を見物する。長い長い階段を地下に降りていく。ここもまた人の波。ヨーロッパの古い石造りの教会その他の建造物などもそうであるが、その昔、まだ満足な機械もなく、すべてを人力で造り上げたもののスケールに圧倒される。

夕方まだ日のあるうちに北京に戻る。オーケストラとの大仕事を終えた後、気が緩んでしまったのか、ちょっと風邪っぽい。

六月六日（月）

午前中は学生四人のレッスンをする。今日は全員ティーンエイジャーである。ここの音楽学院が上海の学

校と並んで中国でも有数の名門校である事はもちろんだが、それにしても西洋音楽を勉強する学生の層は厚く、レヴェルも決して侮れない。しかし「単にピアノを弾くことにかけて長けている」だけで、芸術一般に対する知識や感覚については、それらに触れて吸収できるだけの機会に恵まれていないのでは、という感じがする。

日本に思いを馳せてみれば、日本全国では数え切れないほどいる音楽学生の中で、目先の試験曲だけに捕らわれず、もっと広い視野を持ち得ている学生が何人いるだろうか。しかし日本の場合はその気になれば何でも手に入れられる。逆に日本のような情報過多の社会では、あふれる情報の中から本物を選び分けるのが大変である。日本国内では得られないものがあっても、お金さえ出せば北朝鮮以外、全世界で行けない場所はない。

しかし中国では根本的な事情が異なる。最近は国費で外国に留学するにしても、まず学校を卒業し、その後五年間は仕事をして、ある程度の教育費を国家に還元した、という実績を作ってからでないと許可が下りなくなつたそうである。そのような環境の中でヨーロッパの古い（といって語弊があるならば伝統のある）音楽芸術に打ち込む若者達の姿には、一抹の不安を覚えずにはいられない。

午後は二時より公開の講義をする。タイトルは「読譜技術の重要性」である。

作曲家が全身全霊をこめて完成した作品と我々演奏者との接点は、作曲家がまだ生きている場合は別として、通常は楽譜のみである。そこに盛り込まれている作曲家の意図をその紙面からどの程度汲み取れるか、によって、作品を理解する度合いが変わってくるのは当然の理であろう。例えば譜面上でフォルテの指示があった場合、そこからをフォルテで演奏するのは自明の事ながら、それは同時に「そこまではフォルテではなかった」事も意味する。クレッシェンドをするためには、まず小さな音量で開始しない事には大きくできない。そういった、いわば言われてみれば当たり前前の事柄がいかに見過ごされやすいかを指摘するのが今日

の講義の目的であった。

譜面に記載されているいろいろな用語の解釈を正確に行うには、その時代時代の背景や慣習を知らなくてはならない。モーツァルトとベルクの「アダージオ」は、同じ言葉ではあっても雰囲気異なる。同じ綴りで書かれた言葉であっても、当時使用されていた楽器の特性などによって、単語の意図する効果の差もあるだろう。

それらにアプローチするのに必要不可欠なものは、原典版の楽譜である。その原典版とはいかにして製作されるものなのか：等々、限られた時間のなかで紹介できる事には限りがあっても、最後まで静かに耳を傾けてくれたのは有難かった。講義はドイツ語で行い、通訳は周先生が受け持って下さった。

夜はレコーディングエンジニアの沈さんと食事をする。その時に、たとえば私が北京でオーケストラとデジタルレコーディングを三日間かけて行ったとしたら、果たしていくらぐらい経費がかかるものか、という概算もしてもらった。オーケストラに対してのギャラが諸外国に比べて格段に安いこともあって、ざっと六十万円という数字が出た。旅費、滞在費、テープ編集費用は別途での話である。

この話を後日東京で中国通の人にしたところ、最初の話はそうかもしれないが、これがいざ現実の話として進展し、録音済みのデジタルテープを国外に持ち出す、となると、そこで勝手に金額が変わる可能性が大きいそうである。それに加え中国社会では「契約書」というものの拘束力が極めて弱く、前もっての契約を交わしてあっても、これが随時「ただの紙ツペラ」になってしまう危険を常にはらんでいるそうである。

今晚が北京訪問最後の夜である。最初はかなり抵抗感を覚えた中国式システムも、毎日それに浸って生活しているうちに何となく馴れてしまいそうになる。それがまた怖い。

六月七日（火）

日本に戻れる。嬉しい。呉君一家をはじめいろいろと親身に骨を折って下さった人々に別れを告げるのは名残り惜しいが、やはり私にとって中国は外国であった。人口が多いだけに底知れぬパワーを秘めた国ではある。しかし「洗練されたエレガンス」はまだない。国そのものも、そして音楽界も、これからどのように発展していくのだろうか。環境や科学技術面においては現在の日本に比較して十年以上の遅れがあるとはいえ、常に前進してやまない国である。

日本へは午前中の便で発つ。中国入国の際に心配した税関の再チェックもほぼフリーパス、全ての心配は杞憂に終わった。終わり良ければすべて良しとも言ふ。またそのうちに中国を訪れる機会もやってくるであろうが、まずは一休み。「疲れた」というのが偽りのない感想であった。

北京でピアノを習うには

中国におけるピアノ教育現場とその実状

一九八八年六月三日、北京中央音楽学院にてピアノ専攻科の周^{ウイグレン}仁教授にうかがった話を以下にまとめてみた。周教授は現在ピアノ科教授陣の中核として精力的に後輩の指導に当たるばかりではなく、北京におけるピアノ早期教育のジャンルでもかけがえのない人物である。ハンブルク生れの周教授は、ドイツ語も英語も中国語と同じように流暢に使いこなせる国際人。実際に会って話していると「やさしいおばさん」といった感じの人物だが、その奥に秘めたバイタリティーはなかなかのものである。